

北部九州戦国期城館の平面構造に関する研究

岡寺, 良

<https://hdl.handle.net/2324/1398307>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（人間環境学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）



氏 名 : 岡寺 良

論文題名 : 北部九州戦国期城館の平面構造に関する研究

区 分 : 甲

博 士 論 文 の 要 約

本論文は、日本各地に残される3～4万とも言われる膨大な数の戦国時代の山城・居館（まとめて城館）のうち、特に北部九州について戦国時代の地域史解明を目的とし、発掘調査を行わずとも、縄張り図（城郭平面図）の作成による「城館研究（縄張り研究）」という手法によって戦国期城館群の平面構造の把握が可能であることを示し、さらに城館構成モデルの提示によって中世の在地における領主支配の実像を明らかにしている。論文は、「総論篇」と「各論篇」の2篇からなり、「総論篇、第1部」では、まず北部九州戦国期城館の調査・研究の現状と課題について、縄張り調査・測量調査・発掘調査の調査方法とそれぞれの特質を述べた上で、縄張り調査による精緻かつ明確な図面が資料としてもつ有用性、また短期間に多数の実例を精査できる優位性が示される。次に福岡県を三地域に分けて中近世城館の所在・分布、さらに現段階における調査方法の適用状況を比較検討している。筑前地域では城館数そのものが多く、したがって縄張り調査された例も比較的多く、地域全体の様相が明らかになりつつあるのに対し、筑後地域では城館数が少なく調査対象が主要城館のみに偏在する。一方、豊前地域では、行政による発掘調査・総合調査が主流であり数は少ない。各地域において調査・研究状況は必ずしも一様ではなく、縄張り調査を基本とするさらなる県下の悉皆的な調査の必要性を指摘している。「同・第2部」では国人領主秋月氏の城館を対象として考察を進め、各城館の平面構造を明らかにした上で、城館群の類型化により北部九州における戦国期国人領主の城館構成のモデル化を試みている。秋月氏の支配下にある城館の中でも、畝状空堀群を備える城館の分布域に注目すると、それらは「本城（御隠居城含む）」あるいはそれに近く、密接な関係にあったと考えられる城館と、支配領域の「境目」領域に当たる城館のみであること、これら以外、例えば本拠地と「境目」領域との中間領域にあるような城館には、畝状空堀群は確認できないことを指摘している。防衛戦略上において本拠地たる「本城」と、外部勢力との武力衝突が最初に想定される「境目」領域の城館における優先的な畝状空堀群の敷設・改修を明らかにしている。さらに秋月氏と同盟関係にあるような勢力の城館にも、空堀の本数が多く横堀と組み合わせて曲輪群を一体的に防御する技巧的な畝状空堀群を持つ城館が分布することを示して、秋月氏を中心とした同盟勢力が敵対勢力として見なした豊臣勢力に対する構えとして畝状空堀群を解釈している。「各論篇」では、「総論」とは直接関連性が薄いですが、本論を説明する上で必要不可欠な福岡県内の城館遺跡一覧、個々の城館の詳細検討、引用文書史料などについて詳述し、総論篇から参照できるように構成している。以上より、秋月氏の城館構成について周辺の同盟勢力の城館も含めたモデルを新たに設定し、中世武家領主の軍事的拠点としての城館について、国人領主の戦国期における政治的動向を通じて中世の在地における領主支配の実像を探る新たな資料としての価値を与えている。